3 遺跡整備・復原事業と展示

平城宮跡・藤原宮跡の整備

平城宮跡案内板設置工事

平城宮跡サイン計画に基づき、拠点集合サイン１基、遺構解説サイン３基および道標４基、平城宮跡地図サイン（路面埋込型）４基を設置した。

拠点集合サインは、平城宮の鳥瞰図、平城宮跡地図、平城宮跡の説明文、資料館の案内などを焼付けた陶板を鉄筋コンクリートの躯体に貼り付け、花崗岩切石で外装を施したもので、中規模案内板の役割を持つ。主要な入口に設置する予定だが、今回は、平城宮跡資料館の南側で平城宮跡西面中門跡北入口付近に設置した。

遺構解説サインは、イラストと説明文（和文・英文）を焼付けた陶板をコンクリート躯体に貼り付け、凝灰岩切石で外装したもので、その場所の推定復原図や推定使用状況などを説明している。設置場所は、大膳職、造酒司の井戸跡、式部省である。

道標は、目的地の行先方向を示す陶板を、鉄筋コンクリートリシン吹付仕上げをおこなった躯体に貼り付けたものである。また、平城宮跡地図サインは、現在地を示した平城宮跡の地図陶板をコンクリートの基礎の上に貼り付け、花崗岩切石の縁取りを施し、道標前の床面に設置したものである。設置場所は、第一次大極殿院西側、東側２基、朱雀門東側、式部省の東南部である。工事費は、4,800 千円であった。

宮内省築地復原工事

2000 年度は、前年度施工済みの築地塀の延長工事で、西面と南面の接合部、西面および南面東端部を施工した。今回初めてコーナー部の施工となったことから、入隅および出隅に柱を設け、Ｌ字型を一体として版築の築成をおこなうなどの工法を採用した。また、築地塀の作業方法は先に復原した手法にならったが、仕様については、版築の施工性、仕上がり、耐久性などを探るために前工事で施工した結果を参考に新たに３種類の配合（土：にがり：石灰＝１：0.08：0.07、１：0.08：0.05 及び１：0.05：０）で築地塀｛西面築地の南端から北へ７スパン（33.6 m）、さらに北へ５スパン延長（24 m）計 10 スパン（48 m）及び南面東端部１スパン（4.8 m）を完成させた。今後、長期にわたって観察していく予定である。総工事費は、200,025 千円であった。

朱雀門管理施設新営工事

公開している朱雀門の脇部に案内所と警備員控室の機能を備えた朱雀門案内所を完成させた。また、バリアフリー対策として、朱雀門基壇への見学者導線を考慮し、これまで全面化粧砂利敷きであったところに見学用通路部の舗装をおこなった。舗装には、既存の化粧砂利敷きと違和感のないよう同種の砂利を使用した自然色舗装を採用した。さらに、案内所の奥にある穴門を通りぬけた北側にスロープを設け、朱雀門基壇上に車椅子も登れるように整備した。スロープは大垣に沿わした形とし、景観上も目立たないように大垣と同系色の塗装をおこなった。スロープは復原展示物ではないので、不要時に撤去できるよう分割可能なものとした。なお、案内所を含め朱雀門と一体で管理するため外周柵を拡張し、夜間の機械警備範囲に組み入れた。工事費は、110,775 千円であった。

東院庭園隅楼復原等工事

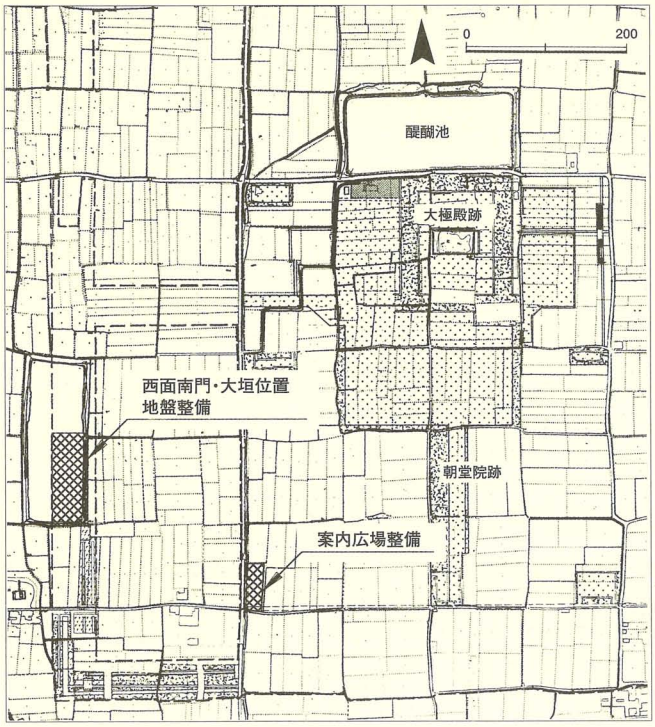
今年度は、東院庭園内の北西部の復原整備で、流盃渠および板塀の復原表示をおこなった。流盃渠は、遺構の直上で、遺構に習い、主に宮跡内発掘調査で転石として集めていた石材（通称：カナンボ石）を再利用し、不足分は外部から調達した石材を補充して復原をおこなった。流盃渠の側石は２段組の形状で、上流には皿形の溜水池を備え、蛇行溝に流下し、最下流部の池への接続が不明確なため池岸上面から流し込むように接続した。板塀は、４種類（ツバキ・シキミ・サカキ・タチバナ）の混植生け垣で表示した。周囲は張芝や植栽、見学用通路は、従前どおりソイルセメント舗装をおこなった。東院庭園外周では、条間側溝の復原表示の延長（59 m）および外周柵を拡張し、夜間の機械警備範囲に組み入れた。工事費は、102,585 千円であった。

藤原宮跡の整備

本年度、藤原宮跡では、西面南門位置周辺の地盤造成および宮西南部の案内広場の設置を実施した。

西面南門は、現在の縄手池東南部付近にあったことが発掘調査で明らかにされている。この西面南門およびそこから北に延びる西面大垣の遺構表示をおこない、一帯を活用に供するため、縄手池の東南部を埋め立てる地盤造成をおこなった。埋め立てによって、南北延長約70mにわたり既存堤防から東へ15m内外の平坦面を確保、次年度以降の西面南門等の遺構表示のための基盤を整えた。なお、護岸は縄手池の他の部分と同様のコンクリートブロック張りとし、造成平坦面の池側端部には、利用者の安全をはかるため人止め柵を設けた。

案内広場は、南部を藤原宮跡で従来設置されてきた砕石敷きの多目的広場（面積310㎡）とし、北部を植栽を取り入れた芝生広場（面積534㎡）とした。植栽にあたっては、クロマツ・イロハモミジ・シダレヤナギ・ヤマザクラ・ネムノキ・ウメ・ヤブツバキ・アセビ・ヤマハギ・ヤマツツジなど万葉集に歌われた植物を、季節性も考慮しながら選択した。この広場の北方には、橿原市立鴨公小学校があり、将来的には万葉植物の学習に用いてもらうことも想定している。また、砕石敷き広場に3基、芝生広場に1基の縁台を設置し、利用者の休息に供した。



2000年度 藤原宮跡整備位置図

特別史跡山田寺跡の整備

1999年度に引き続き、第2次山田寺跡整備事業（2ヵ年）を文化庁からの支出委任事業として実施した。本年度実施した事業は、東面回廊3間分（北から13～15間目）の基壇復元の完成、東面大垣の盛土表示の延長、南門南の参道の表示、ならびに案内広場とそこへの通路の新設である。

このうち、東面回廊は、昨年度に基壇造成および内側の礎石4個を復元したが、今年度は、外側礎石4個と地覆石の復元および回廊床面の自然色舗装を行った。礎石は遺構本来の石材である花崗岩（飛鳥石）を、地覆石は遺構本来の石材に近似した安山岩を材料として用いた。また、案内広場は、利用者への情報提供ならびに休息の場所として、中心伽藍北東方の現道沿いに設けたもの。広場は実効面積約400㎡。脱色アスファルト舗装とし、周囲には植栽帯を設け、多目的に使える縁台3基を置いた。広場東部の総合説明板は、基台の上に石材を立ててフレームとし、そこに山田寺復原イラストと和文・英文の説明を焼き付けた陶板をはめ込んだ。

本庁舎3階大会議室改修工事

2001年度から奈良国立文化財研究所と東京国立文化財研究所が統合し、独立行政法人文化財研究所となることとなった。そして、法人本部を奈良に置くことが決定したことから、奈文研本庁舎の3階にあった大会議室、小会議室、準備室を撤去し、法人本部事務室に改修することとなった。今回の改修工事で、理事長室、応接室、監事室、会議室、総務部長室および総務課室を設置した。各室出入りに支障がでないよう通路は中央に設け、南側各室が線路沿いでもあることから、防音対策を施しつつ、窓を多くして採光を考慮した。工事費は、37,800千円であった。

平城宮跡資料館改修工事

独立行政法人化にともなう組織編成や人員配置の改変に関連し、既存施設の有効活用や一般公開展示施設の充実のために平城宮跡資料館の改修工事をおこなった。これまで展示室の中ほどにあった事務室を平城宮跡資料館建物内の北西部に移転することとし、事務室跡を平城宮跡に関する映像や掲示のためのビデオルーム室に改修する工事をおこなった。また、資料館内にある休憩室について、ブラインドや自動販売機を設置し、見学者へのサービスの向上を図った。工事費は、10,815千円であった。

飛鳥資料館特別展

◆春期特別展示「あすかの石造物」

2000年4月11日～5月23日

かつて飛鳥が日本の首都だった時代に作られた石造物は、繁栄をきわめた都がこの地を去った後も、往時をしのぶ歴史の証人として、村のあちこちに、その不思議な姿をとどめ、歴史学者やこの地を訪れる多くの人々の関心の対象となってきた。

当館が「飛鳥の石造物」展を開き、飛鳥地域に残されたこうした石のモニュメントを紹介して以来、既に10年以上の歳月が流れた。

時代の推移とともに、この地域の遺跡をとりまく環境もそれなりの変貌をみせ、「謎」とされてきた「石造物」も、あらたな発掘調査によって、その性格が更にはっきりと捉えられるようになった例が少なくない。とくに酒船石とそれをとりまく遺跡に関しては、最近のいくつかの調査で新発見が続き、とりわけ明日香村教育委員会の酒船石遺跡北側の発掘では、斉明天皇の両槻宮との関連を示すと考えるこのうえなく重要な遺構が出土し、広く社会の耳目を集めている。

こうした調査結果と前回の特展以来、継続してきたこれまでの石造物復原の作業を広く一般に紹介し、新知見をもとに、もう一度飛鳥の石造物全体を見直してみる一つの機会として、明日香村教育委員会と共催で特別展示を開催した。

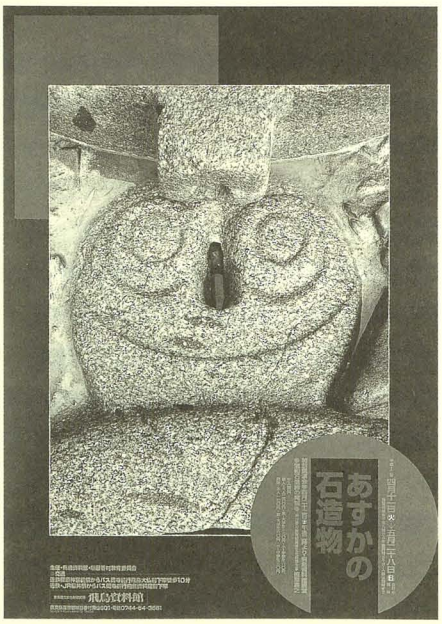
◆秋期特別展示「飛鳥池遺跡」

2000年10月3日～11月26日

たとえば、日本書紀を読めば、天皇や貴族の生活に関して、ある程度情報を得ることはできる。しかし、国民の大多数を占めていた庶民の日常については、全くといっていいほど何も語ってはくれない。飛鳥時代の遺跡の多くも、上層階級の生活にかかわるものがほとんどである。庶民の家やいろいろな職人の仕事場は、後代に削りとられ、失われてしまうのが普通だからである。

飛鳥池遺跡は、運よく現代に残された古代の生産活動の跡であり、往時の職人の日々の仕事の実態を、今に伝える数少ない遺跡なのである。そしてまた、古代の宮殿や寺院などで使われた、さまざまな製品が、どんな場所でどのように作られたのかを、具体的に教えてくれる、貴重な遺跡でもある。この遺跡ではわが国最初の銅貨・富本銭の鋳造跡がみつかっているが、そのほかにも、金銀、ガラス、鉄、銅、漆など各種の工房が軒を並べていた。日本の古代文化を考えていくうえで、飛鳥池遺跡は、天皇の宮殿や大寺院と同じかあるいはそれ以上に、大きな意味と価値をもった、歴史の証人ということができる。

このたび、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が実施した調査の結果、明らかになった遺跡の全貌と、多様な出土遺物とを、紹介する展示会を開催した。



飛鳥資料館、春・秋の特別展ポスター